あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250－23
04(7182)
0861

文化講演会（我孫子市後援）＆総会の開催

5月8日から新型コロナウイルス感染症の位置づけが「5類感染症」になりました。日常の生活も漸く以前の状況に戻りつつあります。

今年も昨年に続き一堂に会しての総会を開催します。是非ご参加ください。また総会の前には同じ会場で山本鉱太郎氏による講演会が行われますので併せてご案内します。（参加費300円、会員無料）

日時　6月9日(金)14時～ 文化講演会
16時～ 総会
場所　あびこ市民プラザホール

文化講演会（我孫子市後援）
「白樺派の文人たちの我孫子時代・その後」
講師　山本鉱太郎氏

講師紹介
旅行作家・劇作家
・略歴：1929年：東京深川木場に生まれる
群馬大学工学部応用化学科卒業
流山に居住してふるさと運動を続けている。
日本ペンクラブ名誉会員
・著書：「新利根川図志」（上・下）、「房総街道繁盛記」
「旧水戸街道繁盛記」（上・下）
「日本列島なぞふしぎ旅」（全7巻）
「奥の細道なぞふしぎ旅」（上・下）
「小林一茶なぞふしぎ旅」
「白樺派の文人たちと手賀沼」、その他多数

ご講演概要

手賀沼は、大正のはじめ頃、砂底から水がしきりと噴き上げ、水が澄んで美しい沼であった。夕方ともなれば沼に逆さ富士が映り、まわりの丘や森もシルエットとなって旅情またひとしおであった。

東京から国鉄でわずか一時間たらずの所にそんなにすばらしい自然が残っているということで、大正年間東京の文士や画家たちが何人も住みつき、一時ささやかながら文士村の感を呈した。志賀直哉や武者小路実篤、柳宗悦、バーナード・リーチらも住み、そのことは多くの文学作品に書かれている。

しかし、大正中・後期になると、それらの文士達は次々に我孫子を去っていった。大正七年九月武者小路は、原始共産社会を夢みて「新しき村」を作るべく九州の日向へ転居。翌八年には柳邸にあったリーチの窯が火災に遭ってリーチはショックの余り母国英国へ帰ってしまった。

そして大正一〇年、柳一家も七年いた我孫子をいよいよ去ることになった。東京で一人暮らしている年老いた母と一緒にいたいためだった。関東大震災があった年の春には志賀直哉も我孫子を引き払って京都に移った。こうして白樺派の人たちはすべて我孫子から姿を消し、彼らがよりどころとしていた同人誌「白樺」も、関東大震災の年ついに廃刊となった。

ところで、我孫子を去った人たちはその後どうなったか。我孫子在住時代の資料はたくさんあるがその後のものは極めて少なく、よくはわからない点が多く関心も薄い。

そこで今回は、「白樺派の文人たちの我孫子時代・その後」と題して、旅行作家の山本鉱太郎氏に語って頂くことにした。

まさに波乱万丈の後半生。武者小路の「新しき村」運動はその後どうなったか。柳宗悦の全国民藝運動は成功したのか、晩年の志賀直哉は……と白樺派の物語はつづく。

嘉納治五郎銅像設置3周年

天神山緑地（嘉納治五郎別荘跡）に嘉納治五郎銅像が建立されてから今年4月15日で丸3年目を迎えた。3年前のこの時期、新型コロナ感染の流行がピークを迎えていたこともあり、事前に準備を整えていた当日の除幕式は残念ながら取り止めとなり、役員を始めとする関係者だけのささやかな除幕となった。

3年目の今年4月15日は、役員と関係者だけの記念写真を撮るという計画があったが、生憎の大雨でこれまた中止となった。（写真は近影の嘉納治五郎銅像）

ところで、この銅像が設置されている土地は我孫子市の土地であり、当会は市に対し「公園施設設置（管理）許可申請書」を提出し我孫子市から「許可書」を貰っている。設置（管理）の期間は3年間で、今回その延長を申請し、引き続き許可された。参考までにその「許可書」を次ページに掲載する。

水の館近くに植樹した桜、今年も開花

手賀沼親水広場。水の館近くに当会が植樹した陽光桜（ヨウコウザクラ）が3月20日満開になった。

陽光桜は、「天城吉野（アマギヨシノ）」と「寒緋桜（カンヒザクラ）」との交配により生まれた桜で寒い地域でも暑い地域でも栽培可能な品種。鮮やかな紅紫色で一重咲き、大輪の花を下向きに咲かせる。花付きが良く、大きく成長すると大変美しく見応えがあるとされる。

残念ながら当会の桜の木はまだ細く花もそう沢山は付けてないが、将来大木になり、大輪の花が付くことを期待したい。

許　可　書

都公第８０６号
令和５年　３月24日

住　所　我孫子市高野山250-23

氏　名　我孫子の文化を守る会
会長　美崎　大洋　様

令和5年 3月17日 付けで申請のあった公園施設設置（管理）許可事項変更許可申請については、次のとおり許可します。

我孫子市長　星野　順一郎

目　的	嘉納治五郎銅像の設置・管理【期間延長】
期　間	令和５年４月１日～令和８年３月３１日
場所（都市公園名）	天神山緑地
管理方法又は内容	申請者による管理
使　用　料	

【条件】

1．設置場所並びに構造は、申請書のとおりとすること。
2．申請者は、公園施設等を損傷又は汚損しないこと。
3．当該施設に起因した事故等が発生した場合は、許可受者において解決すること。
4．公園利用者等の安全管理を十分行うこと。
5．都市公園内の秩序を乱さないこと。
6．申請者は施設設置許可期間経過後又は、公園管理者からの要請があれば速やかに撤去すること。
7．設置物件の変更及び撤去等が発生した場合は、速やかに連絡すること。
8．設置に関する工事を完了したとき、設置をやめたとき及び原状に回復したときは、我孫子市都市公園条例施行規則第２３条で規定する行為等届出書（写真を添付）を提出すること。
9．我孫子市都市公園条例施行規則第４条で規定する「公園施設設置許可の表示」を許可に係る物件の見やすい箇所に表示すること。表示できない特別の事情がある場合は、市長の承認を得ること。

「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」活動に参加して

牧田　宏恭（ひろゆき）　（会員）

私は「美しい手賀沼を愛する市民の連合会(会長:八鍬雅子氏、略称「美手連」)の運営委員として昨年後半から活動させていただいている。昨年発行の当会会誌「あびこの文化」190号に「美手連(所属は市民活動19団体:1995年12月発足)」の概要を報告したように、「我孫子の文化を守る会」は設立当初から、その一員であり、当会の美崎会長は昨年度から「美手連」の理事を務めている。

「美手連」は「手賀沼流域フォーラム」の実行委員会事務局を担っており、その活動は「手賀沼とともに生きる、その流域の自然・生活環境の良いあり方を学習し、美しい手賀沼をよみがえらせること」を目的としていることも報告済である。

「手賀沼流域フォーラム」の実行委員会は、流域の市民活動団体、流域7市(柏、我孫子、印西、白井、鎌ケ谷、松戸、流山)ならびに手賀沼水環境保全協議会で構成しており、公益財団法人・山階鳥類研究所が後援している。手賀沼流域の定義は「あびこの文化:190号」にて説明済である。以下、最近の「美手連」の具体的活動の主な内容(課題)を紹介したい。

(内容)

1. 調査事業

①「都部谷津ミュージアムの外来水生植物(ナガエツルノゲイトウ)の定点観察」(図1)(写真1)

(注)遮光シート利用による生育観察も近く実施予定

外来水生植物(ナガエツルノゲイトウ)の草焼きバーナーによる駆除実験も実施済

なお、バーナーによる実験は「手賀沼公園の護岸」でも実施

②「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」の繁茂状況観察

手賀沼、手賀沼流入河川に繁茂する状況についての調査

③「オオカワジシャ調査・駆除」――――上大津川・高南台、逆井方面など水路調査・駆除実施中

これらのテーマについて、「美手連」会員が学会等の催しで発表している。

④手賀沼水質調査事業

近年、突然として消滅した「ハス」そして「ヒメガマ」「マコモ」の減少の原因について探る一環として「手賀沼水質調査」を実施中。手賀沼の岸部6地点の試料採取(取水)を行い分析、2023年度も実施予定。(写真2)

この①～④の報告は「事業報告書2022年度 第28回手賀沼流域フォーラム」(フォーラム発行)に記載している。

2. 豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業

「美手連」は、柏市教育委員会・生涯学習部図書館の方からの「地域の生きた情報が欲しい。タブレット化が進んでいる現在、使えるデジタル教材が欲しい。」という要望がきっかけで、主に小学生を対象に2021年度から取り組みを開始し、2022年度に第1弾:7作品が完成、引き続き2023年度も継続する。我孫子の文化を守る会は「我孫子の文化人(仮題)」について教材を作成する予定である。

3. その他事業。

①手賀沼をとりまく環境保護・保全のための諸活動(継続・新規テーマ)。

②統一クリーンデイの実施等

③研修会の実施

などが主な内容である。

図 1

写真 1

写真 2

～～～

原田京平ファミリーが筆者の中でも、より親しいものとなったのである。

たった一人で文字資料の山に分け入って、原田京平とそのファミリーの人物像を探し求めていた「我孫子の頃」の調査・研究には無かった、あたたかみとひろがりが生まれて来たのである。

(2) 調査・研究に生まれたひろがり

例えば、「原田睦　八十八歳自選画集」に掲載の「原田睦年譜」から見える睦(原田京平の妻・後述)の人生を例にとると、八十八歳まで生きて彼女の人生を生ききったことが見て取れる。文字資料としての原田睦の人生史からは、五種の様相が見えてくる。

生涯の師となる窪田空穂に教えを受け、卒業作品の日本画が松岡映丘に大いに褒められたという才能溢れる若き「女子美術専門学校の頃」、原田京平との結婚後、夫の画業と子育てを優先し、自らの創作を断つた「我孫子の頃」、夫の病気療養を支え、その逝去後は、女手一つで二女を養育するために奮闘した「世田谷の頃」、戦後、成長した娘たちを芸術家とするために奔走、また、自身も画家としての活動を始めた「杉並の頃」、そして、娘と本格的に創作活動する場所を笠間芸術村に定め、工房アトリエのある家を新築した「笠間芸術村の頃」となる。

以前、この「年譜」を読んだ時には感じられなかったが、今回、注釈を付す必要から再見してみると、それぞれの時代に見せる睦の生き方の見事さ―常に自ら選び取り、目標の達成の為に、いかにして、その覚悟を決め、機動力を発揮したか―が際だつのを強く感じ取ることができたのである。

何故であろうか。それは、加藤充子氏のおかげである。充子氏という生身の人の心のなかで、芸術家原田京平とそのファミリーに寄せる思いが、長年にわたって、充分醸成されて来たからなのである。

やはり、充子氏ほどではないが、長年にわたり原田京平ファミリーの研究を続けてきた筆者とが出逢って、あたたかく柔らかに呼応するものがあったからである。この生身の人＝充子氏が介在し、「世田谷の頃」の原田京平ファミリーを語り、受け手の筆者が知るという点においては、実は「我孫子の頃」の調査・研究には、ついぞ無かったことである。たった一人で文献資料の海を泳ぐように、原田京平ファミリーの人物像を探し求めた「我孫子の頃」の研究との大いなる相違点である。

先に、原田睦の人生史を五つの時代・様相に分けてみたが、その人生が展開された所ところを訪ねて行けば、いまだ、この世田谷のように共に実感・共感できる人々が生きていて、喜びを共にすることが可能かもしれないという希望が持て、調査・研究にひろがりが見えて来たからなのである。それ故、それぞれの時代の読み方が変化したのである。つまり、孤独で閉塞的な研究ではなく、あたたかい血が通い出したのである。もう一度繰り返すが、これは、加藤充子氏のお人柄のおかげである。

さらにもうひとつ、例えば原田和周の「世田谷の頃」の短歌の鑑賞にも変化が生じたのである。和周の短歌の色彩が立ち、形の陰影が深まったのである。もともと、和周の短歌には花なら花の色彩、あるいは、樹木なら樹木の形状、そして、それらに寄せる思い、愛着というものが詠みこまれていたのに、受け手の筆者が感じ取れなかったのだが、実際に住んだ場所を知り眼にすることで、短歌の鑑賞にもあたたかい血が通い、ひろがりと奥行きが生まれてきたのである。

五. 未解決の課題二点について

(1) 原田京平が暮らした頃の「品川用水」は水を湛えていたか？

桜丘四丁目は、千歳船橋駅までは徒歩十分足らず、買い物も便利なところ、高台で緑も多く環境に恵まれた場所で、何がなし空が近く思われる。

原田京平がここに暮らした当時は坂を下りれば、「品川用水」はまだ水を湛えていて、京平の好きな水辺の散歩も可能であったのかも知れない。

我孫子在住の頃の京平は、手賀沼畔に居住し、沼辺の自然を題材に絵を描き、また、優れた沼の短歌を詠んだ。水辺の環境を好み愛した画家で歌人であったから、世田谷に転居しても、近くに水のある環境を選んだのかも知れない。しかし、京平が桜丘に居住した頃(昭和五年三月から昭和十一年一月)の「品川用水」が、まだ、充分水を湛えていたのかどうかの確証は得られていない。

「品川用水」の変容・変遷については、充分時間をかけて結論を出さなければならない課題だと思うので、残念ながら今回の報告書では、(注6・前号に記載)の記述のみに留めておきたい。

(2) 「世田谷の頃」の原田夫妻の芸術活動について

今回の報告は、加藤充子氏の貴重なお話をヒントに「世田谷の頃」の暮らしの解明に重点がおかれ、その方法は、主に原田和周の短歌と、原田睦の「年譜」を用いてのものとなり、「世田谷の頃」の原田京平ファミリーを知るための第一歩を踏み出せたと感じている。

しかし、夫妻の本業である芸術活動については、触れることができなかった。この芸術活動は「雲の流れ」所収の「年譜」に、次のように記されている。

「昭和六年晩秋、睦子と朝鮮、満州の旅行の途に就く。昭和七年四月、春陽会に京城(注・現在のソウル)の風景三点を出品。春、京城森永製菓楼上において、盛夏、平壌東洋拓殖会社楼上において個展を催す。大連満州日報講堂で個展を開催す」。

この二年にわたる夫妻の創作大旅行についての詳しい資料は、筆者は未だ見ておらず、また発見されたという知らせも聞いていないので、この点についても、見送ることになった。

【注釈】

(注7)庭には多くの木々が植わっていた：窪田空穂が、早世した弟子の原田京平を追想して書いた随筆(珍しみと懐かしみ)の中に、次のような一節がある。「和周も小田急沿線の千歳船橋に家を建て、一本十銭で買った木が見上げるようになったなどと話していた。」

「窪田空穂全集」第六巻(昭和四十年六月十五日　角川書店)

〈珍しみと懐かしみ〉の初出は、歌誌『槻の木』(前出)にあり、表記は〈珍らしみと懐かしみ〉である。昭和十一年一月に和周が逝去して、直ちに書かれ、同誌の同年三月号に公表された随筆である。

以下は、「雲の流れ」に収載の和周(京平の雅号)の短歌で、桜丘の家の庭を画家らしい目でスケッチしたような作品である。どのような木々や草花が植わっていたのかが、ある程度想像できる。「我がさ庭」を得て、好きな木々や花々を自由に植えられる喜びが伝わって来る。

また、同歌集の発行人である妻の睦による〈あとがき〉にも、木々の名前が書かれている。

〈家居〉昭和九年

ひさしふかき部屋にすわればとりどりに
　咲ける鳳仙花庭にあかるし

木犀の茂れる下に立つ百合の
　つぼみやうやく太くなりたり

すわうの本葉(もとば)色濃くほに出でし
　土用わか芽のあかるく映ゆる

莟より色づきゆくを見てありし
　紫陽花の花今さかりなり

庭の花おのもおのもに香を放つ
　百合かと思へくちなしの香か

伸ぶるがまゝにまかせたりける庭の樹々
　夏日さへぎり蔭ふかぶかし

伸び伸びて枝さしかはす樹
の蔭に
　今年はじめて苔の生えにけり

我がさ庭やうやく苔のむしたれば
　子に踏ますなと妻に云ひけり

黒土に苔むしそめて我がさ庭
　さらに親しきものとなりたり

床下の何處(いづく)にひそむかこほろぎの
　今年もすでに鳴きいでにけり

いづくにしひそみてなくやかそかにも
　雨にまじりてこほろぎきこゆ

夜のくだちなきつぎてたえぬこほろぎの
　今年もわれのともとなれるか

〈あとがき〉

かつて彼が、寫生の旅(筆者注:京平は風景画家であった)から帰ると先づ庭に出て、「大きくなったな」といって、自ら植ゑかへたり伐ったりした樹々が美しい花を咲かせてゐる、椿も、蘇芳も、うす色の木瓜も。

(注8)睦さん:原田睦(はらだ　むつ・明治三十年三月二十五日～昭和五十九年九月＝原田京平の妻)。長野県上田の人(鉄道省)、荒木勘次郎の次女として青森に生まれる。誕生以前の約束により親友牛原正孝の養女となる。

〈原田睦年譜〉

大正三年十七歳　三月二十八日　女子美術専門学校高等師範科(現女子美術大学)入学。

六年二十歳　四月卒業。巽画会に出品して受賞、松岡映丘に大いに褒められる。鉄道省建設課に就職。この頃福士幸次郎等のグループに入り詩作などをする。

十年二十四歳　原田京平(明治二十八年十月十日～昭和十一年一月十六日・静岡県磐田郡上阿多古村・現浜松市天竜区出身)と結婚。東京目黒より、千葉県我孫子町(現我孫子市)に転居。我孫子町にて、二女麻那、南が誕生。

十一年二十五歳　一月十七日　長女麻那生まれる。

十二年二十六歳　山本鼎に油絵を学ぶも、翌年絵筆を断つ。十四年二十八歳　九月十八日　次女南生まれる。

昭和三年三十一歳　三月二十八日　我孫子町を離れ、上京。世田谷若林に住む。

五年三十三歳　三月世田谷五丁目に聚文画室を建て転居。(現在の加藤邸のある場所。聚文はその頃京平が使用した雅号。)

六年三十四歳　九月から翌年十月にかけて夫妻で、朝鮮(現韓国)京城その他と大連を旅行。

十一年三十九歳　一月十六日　夫和周(京平の雅号)満四十歳にて逝去。

五月二十五日　原田和周　遺歌集「雲の流れ」発刊。

七月　原田和周遺作展を銀座日動画廊(遺作五十余点を陳列)で、八月　大阪阪急百貨店で開催。

十二年四十歳　この頃より、帯その他に油絵具で花の絵を描き生計を立て二児を養育する。

十九年四十七歳　戦争もひどくなりつつあったので十二月十五年住み慣れた世田谷五丁目の聚文画室を売る。

二十年四十八歳　四月、神奈川県相模ダムのそば(吉野町)に疎開。

十二月三十一日に東京に帰る(場所は不明)。間借りして、麻那と南の洋裁で糊口をしのぐ。

二十二年五十歳　疎開先での縁により次女南、猪熊

弦一郎の研究所に学び、後年新制作協会協友となる。

二十三年五十一歳　九月一日　長女麻那、染織を柳悦孝に師事、睦は織物の外交面を一切引き受ける。

二十五年五十三歳　十二月三十一日　杉並区東田町（番地不明）に家を建てる。

二十九年五十七歳　本格的に画に専心。日本画の絵具による洋画を描く。

三十一年五十九歳　五月　女流画家協会　第十回展に出品、以後毎回出品。

三十四年六十二歳　原田三人展（睦・麻　那・南）を横須賀・さいか屋で開催。

五月　女流画家協会会員に推される。

三十五年六十三歳　次女南、ブルックリン・ミュージアムのスカラシップを受けて渡米。翌年猪熊弦一郎の媒酌によりヴイック・アストロゴと結婚。ニューヨークに住む。

四十一年六十九歳　四月　国画会会友に推される。同年六月、茨城県笠間市芸術村にアトリエ・工房を建築転居。

四十七年七十五歳　四月　国画会会員に推される。同年　五月、女流画家協会展で孔雀賞受賞。

五十九年八十八歳　九月　八十八歳記念自選展を水戸・泉画廊で開く。同月逝去。享年八十八歳。

「原田睦　八十八歳自選画集」刊行。（著者原田睦発行原田麻那　昭和五十九年九月二十日刊行）「原田睦　八十八歳自選画集」所収の〈原田睦年譜〉他から引用

さて、今回の取材の目的である「世田谷の頃、どこに住んだのか、どのような暮らしがあったのか？」ということに目を注ぐと、〈原田睦年譜〉の昭和三年三月から同二十年四月までが相当することが理解される。

昭和三年三月の上京、同五年には世田谷五丁目に家を建ててから、昭和二十年四月の神奈川県吉野町への疎開までの、世田谷での十七年間のおおよその暮らしぶりである。睦の人生史の中でも、激動の時期と言えよう。夫の病気療養を支え、その夫が病没しての後、自力で二児を養育するという、大変な時期であった。

また、戦争によって、ファミリーを、夫、そして父との思い出のある場所から、疎開を余儀なくさせられるということになった。

次は、女子美術専門学校の後輩で友人の画家三岸節子と、長女麻那の「原田睦　八十八歳自選画集」に寄せられた手記の一部である。

・原田家が我孫子を引揚げて、東京在住となり、あるとき、御主人の訃報の知らせで、未亡人となった睦夫人、成人した麻那さん、ミナミ（南）さんにお逢いしている。あのころの、子供をかかえた未亡人の生活は、私をふくめてまことに困難を極めた時代である。

〈原田睦さんのこと〉三岸節子

・その頃の絵の描きかたは、花瓶に花を活けて、下書きもせず、ぶっつけ本番油絵具で写生をした。例えば虎杖（いたどり）や、おだまきを彩色筆や、面相筆で糸のような線をデリケートに描いていたので、いわゆるバラなどを大きなタッチで描いた油絵の帯とまったく異なり、見飽きると言うこともなく、「お茶席などにもよく合う」と言って、次々紹介されて、多くの人に喜んでもらったので、夜中の二時頃迄仕事をして右手は筆胼胝で堅くなりよく穴があいてしまったし、毎年冬になると左手は火鉢の炭火で炙胼胝が出来ていたものである。おかげで私達姉妹は何の不安もなく女学校を出た後も勝手な勉強を楽しんで居た。この時期、母は植物に関するかぎり非常なデッサンと、色を見ていたのだと思う。子供心に、真白な羽二重にパッパッと構図を決めて、いささかの狂いも生じないみごとさに感心していた。**〈母の肖像〉原田麻那**

（注9）麻那と南：原田麻那（はらだ　まな・大正十一年一月十七日～平成十八年七月二十五日）。染織家。原田京平・睦夫妻の長女として千葉県我孫子町（現　我孫子市）に生まれる。昭和三年東京世田谷に移転。昭和二十年四月、神奈川県吉野町に疎開。戦後の昭和二十三年、柳悦孝に師事し染織工芸を学ぶ。国画会会員。享年八十四歳。著書に「原田麻那の染織」がある。原田京平・睦夫妻、原田麻那の作品及び関係資料の継承者である、原田喬氏の義母。　「原田麻那の染織」から

原田南（＝ＭＩＮＡＭＩ　ＡＳＴＲＯＬＯＧＯ＝ミナミ・アストロゴ・大正十四年九月十八日～平成二十年四月十九日）。洋画家。原田京平・睦夫妻の次女として我孫子町に生まれる。昭和三年東京世田谷に移転。昭和二十年四月、神奈川県吉野町に疎開。その後猪熊弦一郎に師事し、後年新制作協会協友となる。昭和三十五年ブルックリン・ミュージアムのスカラシップを受け渡米、アメリカ国籍のヴィクトール・エマニエル・アストロゴと結婚、四十一年アメリカ国籍取得。「世界少年少女文学全集」十六　ヨハンナ・シュピリ作、植田敏郎訳（一九六〇年　創元社）の〈アルプスの山の少女〉などの挿絵画家として活躍。

（注10）日本美術院洋画部院友で～春陽会に参加：平成十九年の国際電話による会話の中で、原田京平の次女南の証言に「父は、一生洋画家であり、日本画に転向したということはない」ということがある。このことは、次のような事柄を意味したものと考えられる。

原田京平は、大正九年の日本美術院洋画部解散後、大正十二年の春陽会第一回展覧会に出品したが、その春陽会の特色のひとつに、油彩画ばかりではなく、水墨画や素描など、あるいは、「東洋的」「日本的」油彩表現を志向する者が多く、そのことが同会の初期におけるひとつの特徴となっていった。京平の親しい友人に森田恒友がいるが、森田は小杉未醒と共に、春陽会の文人趣味を代表する画家で、その影響を受けてか、実際、京平も水墨画・彩墨画を描いている。

参照「大正期美術展覧会出品目録」、「近代日本美術

事典」(一九八九年九月　講談社)

(注11)そのご質問にお答えするため、御参考までに次の資料を贈呈させていただいた。

図録「我孫子・白樺派を継ぐ者―原田京平の生涯―」、図録「原田京平展　我孫子を詠んだ歌人　我孫子を描きし画家　原田京平をめぐる人々―白樺と民藝の絆―」、論文『有島武郎全集』未収録・有島武郎の志賀直哉宛書簡―原田喬氏蔵・白樺文学館寄託資料―　瀧田浩(二松学舎大学教授)執筆『有島武郎研究』第十五号　有島武郎研究会発行、論文瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉宛書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料―　平林清江執筆『国文学論集』第四十八号　上智大学国文学会発行、随筆「手賀沼畔居の画家・歌人原田和周(聚文)と、彼が招いた歌人たち」、ポストカード原田京平自画像

あとがき

令和元年(二〇一九年)十月二十二日午前十時、前橋市の原田喬氏へ、電話にて以上の事柄をご報告いたしました。原田喬氏は、調査の進展の速さに驚かれたご様子でしたが、お喜び下さいました。

同氏は、原田京平・睦夫妻、原田麻那の作品及び関係資料の継承者であります。

さて、今回の調査については、無論、筆者一人で出来ようはずはなく、自然に手をさしのべてくださいました大江美子氏、幾田充代氏、きむら　けん氏(作家・「北沢川文化遺産保存の会」主幹)、そして、木村孝氏(「三田用水」研究家・「北沢川文化遺産保存の会」会員)、その他の世田谷区民の方々のお力添えがあったからであります。

特にこの四人の方々には、ふわっと雲に乗せられ、さしたる苦労もなく、桜丘四丁目の加藤充子氏のもとに運ばれたような心地がしています。

また、その体験から「品川用水」のお話をしてくださいました、桜丘五丁目の岡庭英雄氏にも、心から感謝いたします。

そして、何よりも、突然の訪問にもかかわらず、加藤充子氏の心温まるご協力のお陰であると信じております。筆者の聞き間違いでなければ、充子氏は、「いつか、こうしたことが起こると思って、待っていました」、とも言われたのであります。

このように、今回お世話になりました方々のお名前を記してみますと、筆者は本当に人に恵まれている、と感じ入った次第であります。

令和二年(二〇二〇年)五月吉日

(次号(その2)に続く)

放談くらぶ
「白樺と民藝、行商の時代を経て、男女の平等へ」に参加して

芦崎　敬己(会員)

朝からあいにくの雨に降られた四月一五日(土)、午後二時からあびこ市民プラザの会議室で開らかれた我孫子の文化を守る会の放談くらぶ「白樺と民藝、行商の時代を経て、男女の平等へ」の講話に市民や会員二十五名が参加しました。

開催を知らせるチランでは、タイトルが示す範囲の広さに、講師の海津にいな氏がどんな内容を話されるのか、私には講話のイメージが全く掴めませんでした。

講話の構成が小見出しで、①「鉄道と行商女性」として、重い大きな籠を背負い列車に乗り、逞しく暮らしを支えた行商女性からの聞き取り例を紹介する。ドキュメンタリーかと思うと、次には、②「民藝の妻・・・『白樺カレー』」として、明治生まれの夫・柳宗悦と共に民藝運動を支えた兼子は、妻としてだけでなく自らの音楽芸術を極めたと、続く。「カレー」をどう話されるのか。続いて、③「山の神と『奥さん』」として、かつて、山の神と言われた「奥さん」の現状はどうか？参加の皆様と、SDGs・時代の変化をトークします。と説明された。

トークできる自信なんてないので、私は聞くだけと、だんまりを決め込んだ。

少し早口だが海津氏の講話が始まった。

初めに海津氏の自己紹介があり、詳細は省くが大学卒業後は観光学に興味関心があり、現在でも続けている様です。

1　鉄道と行商女性

海津氏が作成した常磐線を中心にした鉄道開通の概要年表と近隣の行商の発生に関しては、我孫子が元々江戸時代には宿場町で、明治二九(一八九六)年の常磐線の開通と同時に、我孫子駅も開設され、常磐炭鉱の石炭輸送、我孫子駅前の製糸工場への生糸の運送等で近代化の波にいち早く乗ることができたといいます。

大正一二(一九二三)年の関東大震災の発生と我孫子町での行商の発生とその後の増加が関連しているという。私が読んだ書籍「封印された鉄道史」(小川裕夫著・彩図社)にも行商が盛んになった切っ掛けとして、『この震災によって首都東京は壊滅的な被害に遭い、(……中略……)東京の胃袋を千葉や埼玉といった農産地が支えることになったのだ。』と分析し、不足した野菜等の農産物を行商が補完してきたといいます。

更に、昭和一二(一九三七)年の利根川下流部の洪水被害により行商が増えました。(前出の著作では昭和一〇(一九三五)年)

しかし、昭和一八(一九四三)年には戦争遂行と物価統制の為に行商組合が解散しました。その後、昭和二四(一九四九)年に組合が開催し、この間は、戦後の混乱で行商行為はできなかったとのことです。

戦後直後は、戦争で夫を失った未亡人、年齢や体力的に農業ができなくなった女性が担い、大いに繁盛した時期がありました。

行商女性が生まれた事情として海津氏は、東京は大消費地となったが農家が減ったこと、鉄道が開通したこと、男性にある家父長的な自尊心が比較的ないこと、重い荷物を背負う重労働ではあったが金銭感覚や接遇で女性に適した仕事内容だったことを上げています。更に、行商による現金収入で女性自身が好きな物を買えることで、家庭内での発言権や経済的地位

が上がったことを特徴付けています。

海津氏は、ご自身が平成一一(一九九九)年に行った、行商人のS・いとさん(当時六六歳)に対して行ったインタビューで、初めの内は行商の辛さ・恥ずかしさがあったが、一五年掛かって行商の面白さや楽しさを知ったとの言葉を聞いたといいます。

私自身は、戦前から続く都市化の現象が農村においても消費経済に巻き込まれ、更に戦後は現金収入の必要性が一層高まったことも要因の一つではないかと思います。

因みに、私は、東京都江東区生まれで、二四歳まで実家に住んでいました。我が家にも「千葉のおばさん」と呼んで、行商の女性が時々来ていました。手拭いを姉さん被りにして、コメや野菜を担いで回ってきて、我が家の玄関のたたきで荷を解いて、近所の人と共にコメや野菜・餅などを買っていました。そして、母がお茶と漬物、冬は味噌汁等の有り合わせの物を出して、一緒に昼食を摂った思い出が残っています。

2　民藝の妻…「白樺カレー」

我孫子と言えば、民藝運動の発祥の地で、白樺派文士達が産声を上げ巣立って行った地として有名ですが、民藝運動の提唱者の柳宗悦の妻で、声楽家の柳兼子が夫の影になり民藝の仲間達を支えながらも、自らの音楽芸術を極める活動を八〇歳を超えても独唱する姿を映像により紹介されました。

その映像は、ドキュメンタリー映画『兼子』(二〇〇七年・渋谷昶子(しぶやのぶこ)監督)で一部を見ることができました。柳兼子の顔写真や挿絵は、何度か見る機会がありましたが、独唱している声を聞くことは初めてでした。

柳兼子は、明治二五(一八九二)年東京生まれで、声楽家(アルト)。東京音楽学校(東京藝大)卒業後、大正二(一九一四)年に柳宗悦と結婚し、我孫子に住まいます。

ウィキペディアによると新婚生活をしていた頃に、日本政府の朝鮮半島への同化政策に反発し、夫婦ともに朝鮮へ渡りリサイタルを開催、同地の人々と深い親交を結んだといわれています。

更に、柳宗悦と、陶芸家の浅川伯教・巧兄弟と共に朝鮮文化を深めて「朝鮮民族美術館」設立に奮闘します。

バーナード・リーチとの親交で、英国風カレーライスに味噌を使ってアレンジしたカレーを作り、仲間に振舞ったと言われています。その時の味やレシピを研究して、平成一九(二〇〇七)年に「白樺派のカレー」が地元有志により開発されました。

兼子は、映像の中で、ピアノの前に立ち、和服を着て、右手をピアノに載せ、伸びやかに歌っています。姿も声も素敵です。

オペラ「カルメン」から「ハバネラの唄」、「早春譜」等を聞きました。

声楽家としての道を閉ざすことなく続けよと言う夫は、一見理解ある風だったが、明治生まれの夫・宗悦は口ほどに家事育児を分担する訳ではなく、兼子が一家の家計、民藝活動を一手に支え続け、自らの芸を貫いた、白樺唯一の女性芸術家だったと海津氏は、評しています。

3　山の神と「奥さん」

さて、講話の最後の項目は、近年ヨーロッパの王室で、王位継承を性別によらずに長子継承に改めるようになっていて、次期女王が誕生する王室が増える予想といわれています。

また、日本の天皇系図を示して、かつて女性天皇がいたことを紹介しました。

日本には「山の神」と言うことばがあり、かつてお宅の奥にいたので「奥さん」などと言われたものの、現状ではどうなのかと疑問を投げかけました。

山の神との呼び方は、今でも通用するかどうか、参加者に対して問いかけました。

4　終わりに

講話の終了時間が迫って来て、正に放談くらぶとしての参加者との意見交換には、至りませんでした。しかし、二～三の質問が出ました。

私自身も、だんまりを決め込んでいようと思いましたが、講話の途中から今回の講話が、女性の生きづらさの歴史の中に、どんなことをどのように工夫して、女性自身が「生」(生きる)を築いているかを考えて貰うきっかけにしたかったのかと感じ、思わず確認の質問をしてしまいました。

江戸時代は勿論、明治、大正、昭和、平成を経て令和の時代に至りましたが、私たちの社会の男女平等に関しては、その理念にはまだまだ至ってないと感じます。

至っていないギャップを私自身も、日々どう埋めるように行動しているのだろうか。

自問しても答えが出ずに、やっぱりだんまりするしかないのか。

あびこだより１０６号

「民藝運動」と式場隆三郎
―精神科医の芸術探究

美崎　大洋

本業の精神医療のほか、ゴッホら芸術家の研究や、200冊にも及ぶ著作の刊行など多彩な活動をした式場隆三郎。しかしその活動が余りにも多岐に亘るため、式場の全体像は曖昧になり、明らかになっていない。

式場隆三郎は、1898年7月2日、新潟県中蒲原郡五泉町(現五泉市)に生まれた。

新潟医学専門学校(現在の新潟大学医学部)に入学、1921年に同校を卒業し、医学博士に。以降、新潟脳病院での勤務、東京での神経科医院の開業、静岡脳病院院長への就任等、精神科医としてのキャリアを重ねていった。

式場病院の創設(当時は国府臺病院)は1936年、式場38歳のときのこと。風光明媚な千葉県市川市国府台の地で、彼の「暗いイメージの精神科に明るさを取り入れ、より文化的で和やかな空気が感じられるように」という想いは、芸術の潤いがあふれる空間づくり、広大なバラ園の造営、近代的な病棟の建設などに結実し、それらは日本の精神医療界に大きな一石を投じることになった。

こうした革新的な医療の根底には、幼いころから心を寄せていた文学への素養、白樺派の人々や芸術家らとの交友など、医療活動以外で数多く関わった事象から得た知見や思想が横たわっていた。具体的には「芸術病理学」の面から、ゴッホやロートレックら芸術家の研究・紹介、山下清の教育支援、草間彌生の発掘、そして柳宗悦が主導した民藝運動への参画、多くの書籍の刊行などの活動が相互に連関し合い、式場病院での医療に大きく還元されていったと考えられる。

ところで「民藝運動」と言えば誰もが柳宗悦の名前を挙げる。式場は柳の陰に隠れて目立たないが、民藝運動の実戦部隊として柳と協力し、時には柳を助け、陰に陽に活動、活躍した。

今回、式場隆三郎の活動の実態を披露しその実像が少しでも明らかにできればと願っている。

「放談くらぶ」で美崎大洋氏の講演を開催予定

日時　6月24日(土)14時～16時
会場　アビスタ第2学習1
（詳細については12ページを参照ください）

（プロジェクト報告）百人一首を楽しむ会（番外）

美崎　大洋

今月の歌（恋の歌その22）

うらみわび　ほさぬ袖だに　あるものを
恋にくちなむ　名こそをしけれ　　（65）

【現代語訳】
恨んで恨む気力もなくなり、泣き続けて涙を乾かすひまもない着物の袖さえ(朽ちてぼろぼろになるのが)惜しいのに、さらにこの恋のおかげで悪い噂を立てられ、朽ちていくだろう私の評判が惜しいのです。

【語句】
【恨みわび】「～わぶ」は「気力を失う」という意味。【ほさぬ袖(そで)だに】「ほさぬ袖」は、いつも泣いて涙を拭いているので「乾くひまもない袖」という意味。副助詞「だに」は「～でさえ」のような意味で、程度の軽いものを示して、重いものを類推させる。【あるものを】「ある」の前に「口惜し」を補って考える。「ものを」は詠嘆をこめた逆接の接続助詞で「袖が朽ちるのさえ悔しいのだから」と、後に恋で悪い噂が立つことと比較している。【恋(こひ)に朽ちなむ　名こそ惜しけれ】「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形で、「む」は推量の助動詞「む」の連体形。「名」は「評判」の意味で、「こそ」は強調の係助詞。「失恋の噂で汚れてしまいそうな私の評判がとても残念だ」という意味になる。

【作者】
相模(さがみ。998?～1068?)源頼光(よりみつ)の娘、もしくは養女と言われる。相模守の大江公資(きみより)の妻となり任国へ一緒に行ったので、相模と呼ばれるようになった。歌論集「八雲御抄(やくもみしょう)」では赤染衛門、紫式部と並ぶ女流歌人として高く評価されている。しかし実生活では悩みが多く、夫の任地相模国に随行したものの、結婚生活が破綻し、1025年(万寿2年)頃離別した。この頃、四条大納言藤原公任の息男であり、自身も歌人として名高い中納言藤原定頼(さだより)や源資道(すけみち)と恋愛したが上手くいかなかった。一条天皇の第一皇女、脩子内(しゅうしない)親王の女房となり、歌人としての評価を固めた。

彼女は数々の歌合に名をつらね、後朱雀・後冷泉朝の歌壇で活躍した。また彼女は和歌六人党(藤原範永・平棟仲・藤原経衡・源頼実・源頼家・源兼長)の歌道の指導的立場にあったばかりでなく、能因法師・和泉式部・源経信などとの交流もそれぞれの家集から窺える。『後拾遺和歌集』では和泉式部についで第二位の入集歌数を誇る他、以降の勅撰集、家集等に多数作品を残している。

恋愛関係が表面化する藤原定頼とは、任国下向以前から何らかの交流があり、好意を抱いていた。大江公資に強引に妻にされ、任国下向させられたのは、彼女にとって不本意なことだった。しかも、夫公資はやがて現地の女性と懇ろになり・・・といった悩みを、1024年(治安4年)正月、百首の歌に詠んで伊豆走湯権現の社頭に埋めた。すると4月になって、権現からの返歌だと称する百首の歌が社僧からもたらされた。彼女は、それに対して更に百首の返歌を詠んだ。家集にはそれらが収められているが、権現作と称する百首を詠んだのが誰なのかは未だに不明である。その中に、夫が愛人を作ったことを訴える歌、

わかくさをこめてしめたるはるのゝに
　われよりほかのすみれつますな

権現（天本人ではないかとも言われる）がなだめるつもりで、

なにか思なにをかなげくはるのゝに
　きみよりほかにすみれつませじ

ところが、ごまかしても無駄だと火に油、

もえまさるやけのゝべのつぼすみれ
　つむひとたえずありとこそきけ

「焼け野の野辺の坪菫」という表現に、浮気相手の田舎女に対する敵意と蔑視が感じられる。別の歌では女を「そほづ」（案山子）にも例えている。

関連狂歌

恨みわび涙の雨に濡れにけり
　わが身の虫はきてもかひもなし

うらみ侘びほさぬ袖だにあるものを
　此の四五日は雨の日ぐらし
　　洗濯物が干せずに雨を恨む

売れず侘び干さぬ鮎だにあるものを
　塩にくちなむ名こそおしけれ
　　売れ残った鮎は塩漬けとは名前が泣く

関連川柳

糞(こい)に朽ちなむ酒樽や油だる

二三日間がありや相模うらみわび

参考文献）
淡光ムック　百人一首入門　有吉保・神作光一　監修（淡光社）
インターネット百人一首各種投稿文

我孫子市白樺文学館基金にご協力をお願いします

我孫子市白樺文学館基金とは

　我孫子市白樺文学館の事業の充実を図るための基金として令和５年度から設置されました。文学館の設備リニューアルなど、我孫子市白樺文学館の充実に関する事業のための基金です。

文学館事業充実のために

　白樺文学館は、平成 13 年に私立として開館し、平成 21 年に我孫子市に移管され「我孫子市白樺文学館」として再出発しました。白樺派の魅力をはじめ、我孫子ゆかりの文人、画家たちを紹介するために資料収集、調査研究を行っています。

　白樺文学館が今まで以上に魅力ある展示、企画を実施して行くためには展示ケースを新しくするなど設備更新が不可欠です。

　我孫子の魅力度向上のため、皆様のご協力をお願いします。

募金方法

　白樺文学館、我孫子市教育委員会文化・スポーツ課内に募金箱を設置するほか、白樺文学館が主催するイベントなどでも募金箱を設置しています。
また、我孫子市教育委員会文化・スポーツ課の窓口でも対応していますので、お気軽にお問い合わせください。

ふるさと納税の使い道としても選択できます

　ふるさと納税の使い道として、我孫子市白樺文学館基金を選択することができます。
　詳しくはふるさと納税のページをご覧ください。

（白樺文学館より）

常設テーマ「白樺派と我孫子 2023」２月１日から開催中です。

　今回の常設テーマ展では、山田家コレクションを中心に紹介します。初公開資料もありますので、ぜひこの機会にお越しください。会期２月１日（水曜日）から７月９日（日曜日）まで。

シリーズ動画「我孫子を愛した文人たち」配信中

　白樺文学館と杉村楚人冠記念館が我孫子インフォメーションセンターアビシルベと協力して動画を作成しました（各館全 10 回、1 回 10 分程度）。各館の学芸員がそれぞれのテーマについて楽しく語ります。ぜひご覧ください。

（我孫子市公式ホームページより）

四十回短歌の会（最終採択の一首）三月二十一日実施

工作で子の作りたる鍋敷きは
古びしたれど食卓にあり　村上　智雅子

冬の終り告げて咲くとうクロッカス
春陽を受けて黄にかがやけり　納見　美恵子

卒業の孫むすめの持つスイトピー
ゆれてひとり母深きため息　佐々木　侑

沼辺りにマスク外して一息すれば
水面を連れ行く仲良し真鴨　飯高　美和子

山茶花の散し間も無くこぶし咲く
最速開花に花水木まで　芦崎　敬己

希望校の夢叶わずも受験終え
孫の笑顔に胸なでおろし　美崎　大洋

一期一会と思ほへる人また逝きて
風花まひく白く幽かに　伊奈野　道子

永き冬終はりを告げる花の兄
色もかをりも今春めきて　松浦　彩

「花の兄」…「梅」のこと。梅は、早春、どの花よりも先に咲くことから「花の兄」「花兄（かけい）」と呼ばれるようになった・俳句では春の季語としても用いられている。因みに「花の弟」は「菊」（編集者註）

楚人冠俳句

昭和九年　夏

立話蛙がないてやめにけり
苔水の石にしみ出る氷室（ひむろ）かな
扇上げてそれと別（わかれ）を知らせけり
妄執の一絲をつけぬ裸形（らぎょう）かな
墨の香の畫樓に籠る初夏の雨
磯に乾く島の盆供（ぼんく）の鶏頭花

当会の行事予定

□　我孫子市後援・文化講演会と総会

講演会

日時　6月9日(金)14時～15時半
会場　あびこ市民プラザホール
講師　山本鉱太郎氏
演題　「白樺派の文人たちの我孫子時代・その後」
参加費　300円（会員　無料）

総会

日時　6月9日(金)16時～16時45分
会場　あびこ市民プラザホール

□「放談くらぶ」

日時　6月24日(土)14時～16時
会場　アビスタ第2学習室
講師　美崎大洋氏（当会役員）
演題　「民藝運動」と式場隆三郎
　　―精神科医の芸術探究―
参加費、会員無料、非会員三〇〇円
申し込みTEL(7185)0675　佐々木まで
（10ページ「あびこだより」参照ください）

□プロジェクト「短歌の会」

第四十一回短歌の会
日時　5月23日(火)13時30分～
場所　けやきプラザ10階小会議室
◎短歌に興味のある方、見学＆体験ができます。

我孫子市の新型コロナワクチン接種状況

接種状況（令和５年５月７日時点暫定値）

オミクロン対応ワクチン（初回接種修了者）

年齢	接種対象者	接種者数	接種率%
12歳以上	109,063	64,540	59.18

5回目

年齢	接種対象者	接種者数	接種率
60歳以上	49,499	32,428	65,51

4回目

年齢	接種対象者	接種者数	接種率
全年齢（12歳以上）	121,665	65,970	54.22

編集後記　新型コロナウイルス感染症の位置づけが5月8日から「5類感染症」になった。これからはインフルエンザと同様に、医療費等について健康保険が適用され自己負担となった▼すでに3月13日から、「マスク着用は個人の判断」ということになり「本人の意思に反して周りがマスクの着脱を強いることがないよう」厚生労働省も指導している。確かに電車内でもチラホラマスク無しの人をみかけるようになった・▼流行とは違うが、国の方針により国民の考え方や、やり方が誘導される場合もある。「押印廃止」も世界のデジタル化の流れに沿って国が方針を変えた一例だろう▲ある任意団体で会計監査を務める人が押印廃止という時代の流れを理由に監査報告書への押印を頑なに拒否した。しかしこの人、大幅に緩和された「マスク着用」について真っ先に実行するかと期待したが、頑固にマスクを着用している。本人の意思を尊重しますが・・。（美崎）